

天理大学附属天理参考館（以下、天理参考館）で開催中の第五六回企画展「チゴメの国ラオスーメコン河流域の暮らし」（以下、企画展またはラオス展）（一〇〇七年一〇月一七日～一〇〇八年一月七日）も、好評の内にまもなくその会期を終えようとしている。

この企画展は、総合地球環境学研究所（以下、地球研）の生態史プロジェクトによる研究成果公開の一環として、地球研と民博および天理参考館の三者によ



「日本とラオスの交流のあゆみ」コーナーでは「民族調査団史」エリアを設け、先輩研究者撮影の写真パネルを展示した



モチゴメ観察会でラオスのモチ稻を観察。穂摘み体験をする参加者

ハイ(醸造酒)を竹のストローで飲む合うシーンを展示してみようとなつた。ところが、ラオハイの吸酒というテーマをもつて収集した博物館はなく、それが個別の視点で収集していくと、資料をドッキングさせて一体化させることにした。まづ、吸酒器(酒壺と

他館の資料や個人コレクションを借用して、展示に充てるという手法はよくなされているところだが、複数館の資料を一体化させて展示するという発想は思いもよらなかつた。関連する博物館や研究機関、研究者が互いに連携し、情報を共有すれば、一博物館ではなしえない展示を可能とし、フィールド研究でえた成果や情報を展示という表現で、社会に還元することができます。これを改めて認識させてくれた展示企画となつたのは、いうまでもないことであるう。

らしを理解するとともに、いくつかの部分でその変化を見極めることができるようになった。また、第二次世界大戦後におこなわれた日本の学術調査団による調査史を辿ることにより、知るこ

複数館の資料を
一体化して
企画展を作る

天理大學附屬天理參考館

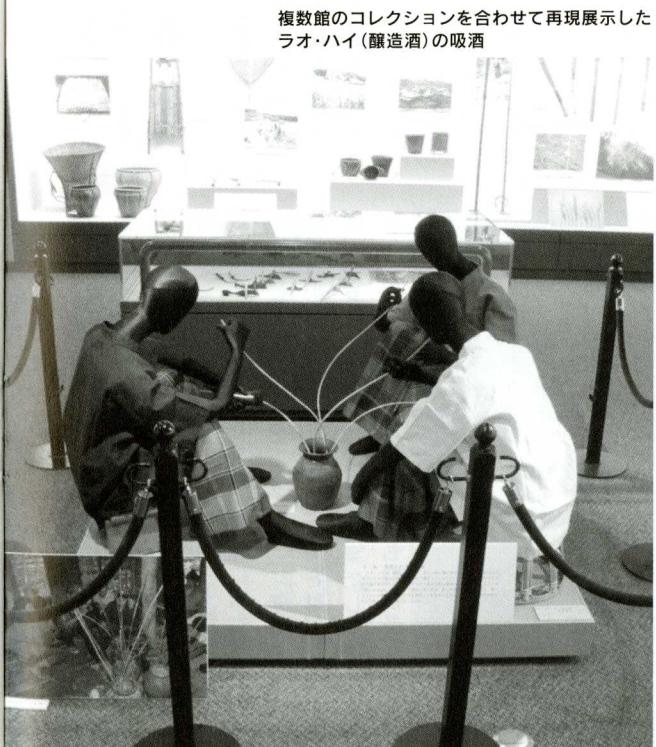
医療機関の手を煩わせることも少なからずあつた。ただ、お互いの試行錯誤もあり、博物館連携の難しさや今後の可能性、あ

るいは研究成果の社会的還元の方法、過去の調査研究による遺産の活かし方、メコン河流域の地域特性などを、改めて考え方直す機会ともなった。

今回のラオス展の企画に携わったのは、地球研で生態史プロジェクトを構成する九研究班の内のモノと情報班(以下、モノ班)であった。モノ班では、一九四五年以後にラオスを中心とするメコン河流域から収集された生活文化資料を所蔵する日本の博物館から資料情報入手し、横断検索の手法を導入すれば、国内に分散する資料の再統合が可能になると判断した。そこで、研究者間で資料の利活用を図るために資することを目的に各博物館ごとで所蔵されているメコン河流域からの資料のデータベース作成を試みた。その結果、モノ班ではモノをとおしてラオスの人びとの暮ら



「モチゴメの国ラオス」展入口付近



高機や漁具・農具などが並んだ展示室。
展示品の多くは初公開資料



月刊 1月号 2008 08